

〈研究ノート〉

〈価値〉と〈価値観〉の問題へ —— 〈南北問題〉ノート (6) ——

徳 永 俊 明

目 次

- 1 〈価値〉と〈価値観〉
- 2 現行〈価値〉の〈反価値〉化
- 3 〈価値観〉の転換

1 〈価値〉と〈価値観〉

人類が、今日ほど基本的・総体的・即時的な〈価値観〉の点検を迫られたことはないだろう。人類は、物理的存在そのものの危機、すなわち自らの生存の危機・自らの生活の基礎としての地球の自然の危機を、自らの選択＝〈価値判断〉によって作り出したのである。

我々は、あるいは個人として、あるいは集団として、感知できる物事について絶えず〈価値判断〉を行なっている。ここで、〈価値〉とは、商品の価値ではなく、「良い」とか「悪い」とか言われるモノやコトの性質を指す。たとえば、Aはプラスの〈価値〉を持つとされ、Bはマイナスの〈価値〉＝〈反価値〉を持つとされる。あるいは、Cについて、プラスの〈価値〉を持つと考えるか、マイナスの〈価値〉を持つとするか、判断に悩むこともあり、即断を迫られることもある。我々は、諸〈価値〉の洪水の中で、いくつもの〈価値判断〉をしながら生きている。

そして、我々のこのような〈価値判断〉は、一つひとつの物事についてそれぞれバラバラのモノサシをもって行なわれるのではなく、「自分なりの」モノサシをある程度持って行なわれる。このことはある時代のある社会につ

いても言える。たとえば、江戸時代の日本社会では、封建的な考え方が一般的なモノサシとされた。このように、〈価値判断〉を行なう際に用いられる通常の基本的なモノサシが〈価値観〉（あるいは〈価値意識〉）である。

我々は、この〈価値〉と〈価値観〉の点検と転換の課題に、今、世界的規模で直面している。

ところで、そもそも人類史そのものが、第1に〈価値観〉の転換の歴史であった。隷従から自由へ、差別から平等へ、戦争から平和へ——人類は、絶えず、〈価値観〉の転換を行ない、それに導かれて自らのあり方をつくってきたのであった。第2にその〈価値観〉の転換の基本方向は、少なくとも人類が階級社会に移行してからは、〈価値〉をモノヤコトから〈人間〉自体へ移し換えていくというものであった。たとえば日本の封建制下で一揆を起こした農民たちは、封建制度というモノにではなく、自らの〈人間〉としてのあり方に〈価値〉の所在を移そうと試みたのであった。もちろん、これらのたたかいは、権力による不当な〈価値観〉の強制とのたたかいと、同時に自らの〈価値観〉の点検と転換へのたたかいとを言わば二重のたたかいであった。

我々は、我々自身が創造者になり、我々自身がその被創造物になってきた。すなわち、我々は、自らの〈価値観〉を自ら点検し転換することによって、新たな〈価値観〉に拠（よ）って生きる新たな我々をつくり出すことができることを歴史は証明してきたのである。

旧い〈価値観〉＝すでに〈人間〉への〈価値〉の移転という一定の転換が基本的に果たされたもの（たとえば「天皇主権」制など）への回帰を図ったり、現行の〈価値観〉のうちその点検が同様に行なわれ、転換の基本方向がすでに見えているもの（たとえば「男女不平等」論など）の固執に努めることは、反〈人間〉的行為である。なぜなら、それらはいずれも、〈人間〉の〈価値〉を否定することによって、我々を《〈人間〉可能態》でない状態に置

〈価値〉と〈価値観〉の問題へ（徳永）

こうとするもの、我々の〈《人間》可能態〉としての自らの確保の努力を阻むものだからである。

このような反動的〈価値観〉とは別に、進歩的業績を作りながらも、その中になお〈価値観〉の混乱を残している例もある。手元の書物を見るだけでも、A. センは「経済発展と人間的発展との結びつき」という表現で、説明もなく「経済」を「人間」の前に置き（『貧困の克服』）、M. ハーツガードは「経済効率性と社会的幸福の兼ね合い」と言って、モノ・カネと人間との間、「効率」と「幸福」との間でふらついている（『だからアメリカは嫌われる』）。

また、「経済情勢」が分析されたり、報道されたりするが、カネやモノの動きだけが対象とされ、〈人間〉が主人公とされないことは多い。「政治情勢」とか「社会情勢」とかの場合も同様である。重要なのは言わば〈人間情勢〉であろう。

さらに、「そもそも何に、どのような価値を認めるかは、人それぞれのそれこそ価値観による。十人十色というものだ」というような主張は跡を絶たない。果たして、そうか？ 問題は、このような主張をする者自身が、自らを、同時に他人を〈《人間》可能態〉として扱うかどうか、である。このことをも「主観」云々と言うとすれば、それこそ身も蓋（ふた）もないのであるが、もしそのように扱わないのであれば、すでにその議論には積極的意味がない。なぜなら、我々は、自らを植物として、あるいは動物として議論しているのではないからである。たとえば、いわゆる「真・善・美」について、「何を真とし、何を善とし、何を美とするかは、人それぞれだ」ということになるだろうか？ そうはならない。〈人間〉にとって、女性差別論は真ではないし、侵略戦争は善ではないし、環境破壊は美ではないことはすでに明らかである。

〈価値観〉のいわゆる「多様化」なるものも無限には行なわれ得ない。そこには自ずと「我々 = 〈《人間》可能態〉」という枠が前提されるのであって、この枠を超えたところには「多様化」そのものがあり得ない。

また、諸「価値」相互の間には、言わば席順を設定することができるし、

しなければならない。その基準は、同様に「我々 = 《人間》可能態」ということであって、まずはパソコンの〈価値〉より食料の〈価値〉の方が大きいと言うことができる。

「なにもむずかしい課題を立てなくても、少しずつでも良くなってきているのではないか」というような議論も横行している。しかし、第1に、まさしく〈価値観〉の転換への心ある人々のたたかいが「良くなってきた」のであって、そのような努力のないところに「良くなる」という現象は起こり得ない。「良くなってきた」のではない、「良くなってきた」のである。第2に、「良くなってきた、騒ぐ必要はない」という主張は、良くなる可能性を奪われている幾億人もの人々には通用しない。ここでの議論は、彼らにも通用する論議でなければならない。彼らのそのような状態を無視した「議論」は、人間社会ですでに議論と言うに値しない。ここでも、我々一人ひとりの〈絶対的存在〉、あるいはその〈社会的関係〉というあり方を忘れるならば、そのような主張は直ちに崩壊する。こうした「議論」の〈価値〉こそ点検が迫られているのである。

また、「〈価値観〉を点検し、転換しよう」という訴えに対して、「今の生活に別に不満はないよ」などとする回答は、極めて成り立ちにくい。「不満がない」という感想を持つことは思想・信条の自由という枠組みに属する事柄であって、そのこと自体に不当性はないだろう。しかし、たとえば環境破壊に狂奔する者たちに「不満」を示さないということは、彼らの行動をその分容易にし、そのことは同時に、他の人々の《人間》可能態としてのあり方の確保の作業をその分妨害することになるのである。我々の〈社会的関係〉においては、問題は、我々の個人的・主観的な感じ方という枠を超えたものなのである。

2 現行〈価値〉の〈反価値〉化

今日の我々の〈価値観〉の点検とその転換の緊要性は、我々が、そもそも〈人間〉として生きることそのものが危機に直面していることにある。自然

〈価値〉と〈価値観〉の問題へ（徳永）

の法則的営みの破壊、〈人間〉の生命そのものの蔑視、精神的活動に対する圧迫、民主主義の侵害、人間の間への従属、個人の可能性の強奪、抗争の強制、歴史の偽造など——これ以上の苦しみと「犠牲」が必要だろうか？もう十分である。「いや必要だ」と根拠を持って言える者はいないだろう。根拠がないから、説明もなくただゴリ押しをするしかないのだ。

その転換の可能性はどうか？ 少なくとも、先人たちにできたこと、子どもたちがやっていることを我々にはできないという証拠はない。

人類が今日直面している最大＝緊急の課題は、個々のモノやコトの〈価値〉の判定の作業に右往左往して自らを忙しくすることにあるのではなく、現行の基本的な〈価値〉そのものの点検と転換に着手することにある。

戦争の問題、環境破壊の問題、〈南北問題〉など、我々の〈《人間》可能態〉としての存在そのもの、「〈人間〉の4要素」という最小限の要素を脅かす諸問題の拡大と深刻化は未曾有の事態になっている。しかし、それらは個々の課題として解決を待っているのではすでにない。我々はもはや、それらの個々の問題を生み出す基本的〈価値〉そのものの点検と転換を迫られているのである。

では、その点検と転換を迫られるべき現行の基本的〈価値〉——正確には、それはすでに〈反価値〉に変質している——とは何か？ 言うまでもなく、それは、階級分裂＝独占と差別にもとづく人間による人間の搾取を〈価値〉とする「資本主義」である。そして、これを基礎とする今日の支配的〈価値観〉は、まず「資本主義」の基本原則としての「大量生産・大量消費・大量廃棄」——したがって、地球＝自然からの「大量収奪」も行なわれる——と、その中で人間たちの「闘争」＝「勝負」を至上のものとし、それが「グローバリゼーション」という形態の中で、戦争・環境破壊・〈南北問題〉などの反自然的・反人間的な諸問題をますます深刻にしている。

1974年に、国連特別総会が「新国際経済秩序（N I E O）樹立宣言」を採択して、「現行の国際経済秩序のもとでは、公平かつバランスのとれた国際社会の発展を実現することは不可能であることが証明された」として、現行

国際経済秩序の〈反価値〉化の判断を下してから、すでに30年になろうとしている。

「資本主義」を基本的〈価値〉とする諸〈価値観〉——これこそが今我々が正面から点検し、転換を図るべき対象なのである。

この作業はまた、「資本主義」のたとえば単なる否認に終わるものではない。「資本主義」に囚（とら）われ、その本来的〈価値〉の発現を妨げられているモノやコト——〈ヒト〉、民主主義など——を解放する作業ともなるのである。

そして、このような作業を進める中で、我々が《人間》可能態〉としての存在を確保する基本的枠組み、すなわちそのような新たな〈価値〉の発見とそれを基軸にした新たな〈価値観〉が創造されていくのである。

また、〈日本〉の〈価値〉も大きく揺らいでいる。いや、〈反価値〉化に向かって疾走していると言うべきであろう。日本国憲法・前文は、「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思う」と述べて、〈日本〉が選択すべき〈価値〉の基本的な内容を明確にした。また、〈日本〉は、国際的紛争の平和的解決と基本的人権・民族自決権の尊重などを謳（うた）う国際連合に加盟した。しかし、国民の基本的人権の侵害、アメリカの世界支配政策への追随は、とどまるどころを知らない。

志賀直哉の「全体自分は何を要求しているのだろうか？」との問い（『暗夜行路』）は、今、我々が問うべきものとしてあるのである。

3 〈価値観〉の転換

我々を取り巻くモノやコトの〈価値〉および我々が現在持っている〈価値観〉を点検し、それを転換するという作業に進むということは、なお形式を言っているにすぎない。というのは、特定の〈価値観〉の点検とその転換ということならば、進歩的〈価値観〉を「点検」し、それを反動的なものに「転換」するということもあり得るからである。憲法「改正」論はその典型

例であろう。

したがって、重要なことは、現在の〈価値観〉の点検と転換はあくまで〈進歩〉という方向での作業でなければならないということ、*そしてそれを保証するものは点検と転換に用いる基準の正しさにあるということである。

この現行の〈価値観〉の点検という作業の基軸は何か？ 言うまでもなく、それは〈ヒト〉⇒《〈人間〉可能態》⇒〈人間〉という我々の本来のあり方への取り組みである。それは、すでに、人類が誕生以来、意識的にあるいは無意識的に追求してきたものであって、決して目新しいものではないし、今日の世界の状況からは手遅れになりかねないものであって、時期尚早などと言うべきものでもない。《〈人間〉可能態》としての我々一人ひとりの本来のあり方への本格的接近という道以外のどのような道にも、もはや少なくともそれを本道として位置づける根拠はないだろう。個別的ないかなるモノも、いかほどのカネも、我々の《〈人間〉可能態》としてのあり方を我々に保証し得ないことはもう十分に明らかになった。これ以上の‘実験’を他人に強いる根拠も、その必要もない。また、モノ・カネを主人公にした‘分析’をなお必要とする、《〈人間〉可能態》の話などその次だ、というような主張も、すでに根拠を失っている以上、無用と言うほかない。

では、この現行の〈価値観〉の点検という作業の内容はどのようなものか？ 我々はすでにそれを持っている。「〈人間〉の4要素」および「〈人

*本「ノート」では、問題を分かり易くするために、〈進歩〉と〈発展〉とは区別している。〈進歩〉とは〈ヒト〉が〈人間〉に接近することであり（「ノート（3）」参照）、〈発展〉はたとえば「ある政策が侵略戦争に発展する」というようにも用いられる。

したがって、たとえば1986年に国連総会が決議した『発展の権利に関する宣言』が「発展とは、人民全体及び全ての個人が……彼らの福祉の絶えざる増進をめざす包括的な経済的、社会的、文化的及び政治的過程である」と言う時、それは本「ノート」での〈進歩〉に相当する。

間〉への4条件」である。

〈4要素〉を否定するところには議論をする主体自身＝〈人間〉自身が存在し得ない。したがって、そこには〈価値観〉をめぐる議論も、いかなる他の議論も行なわれようがない。

また、〈4条件〉を否定するところに議論をする意味は存在し得ない。なぜなら、それはもうすでに、議論をする主体そのものが、〈ヒト〉たろうことも、《〈人間〉可能態〉たろうことも、〈人間〉たろうことも放棄している状態であるからである。我々は、くり返し断ってきたように、自らを植物に見立てたり動物と見なしたりして議論しているのではない。

〈4要素〉からの点検——(1)それは〈自然の法則的営み〉を破壊するものではないのか？ (2)それは我々の〈生物としての存在〉を危うくするものではないのか？ (3)それは我々の〈精神的活動〉を阻害するものではないのか？ (4)それはこのような三つの要素の展開を進める〈社会的関係〉を侵すものではないのか？

これは、言わば1次的基準である。というのは、〈4要素〉こそ人間が〈人間〉としての存在を確保しうる最小限の要素だからである。まずこの基準が1次的基準として据えられないとすれば、我々は人間の〈人間〉としての存在そのものを危うくするような〈価値判断〉に導かれかねないからである。今日の世界と日本の状況は、この1次的基準での点検をまず迫っているところにその深刻さが表れているのである。

〈4条件〉からの点検——(1)それは我々の〈絶対的存在〉という事実に反するものではないのか？ (2)それは我々の〈全体的存在〉への接近を妨げるものではないのか？ (3)それはこのような二つの条件の確保に向かっている〈協同的關係〉の創出の障害となるものではないのか？ (4)それは我々のそのような〈進歩的立場〉を侵害するものではないのか？

これは1次的基準での点検を前提にした2次的基準である。この基準での点検を否定することは、それがどのような手法によるものであろうと、我々の《〈人間〉可能態〉としての本来的あり方そのものを否定することなしに

はなし得ないだろう。

こうして、「〈人間〉の4要素」・「〈人間〉への4条件」は、まさしく諸〈価値観〉の鏡なのである。

今「資本主義」は、この1次的・2次的基準をもつての根本的な点検の対象になるべきモノとしてあるのである。なぜなら、すでに述べたように、今「資本主義」こそが我々人類の直面し得る総体的な危機をもたらしているからである。

我々は、世界人権宣言＝国際人権規約や日本国憲法などによって「思想の自由」を保証されているが、他人の〈進歩〉の努力を妨げる思想の行使を「思想の自由」と称することは許されない。なぜなら、「思想の自由」を侵害する「自由」が認められるなら、「思想の自由」という考え方自体が成り立たなくなるからである。世界人権宣言の第30条も「権利及び自由を破壊する活動の不承認」を「この宣言のいかなる規定も、いずれかの国、集団又は個人に対して、この宣言に規定する権利及び自由のいずれかを破壊することを目的とする活動に従事し、又はそのような行為を行う権利を認めるものと解釈することはできない」と規定している。

さらに、我々には、自らのあるいは他人の〈進歩〉の努力を否定する論理はない。我々が自分—他人の関係、すなわち社会的関係の中で生きている以上、自らの〈進歩〉の否定は他人の〈進歩〉の妨害となり、他人の〈進歩〉の否定はそのまま自分および他人の《〈人間〉可能態》としての存在の否定となるからである。

そのような現行の〈価値観〉の点検と転換の主体は誰か？ それは、まずは我々＝〈自分〉以外にない。なぜなら、第1に、支配階級は現行の〈価値観〉の内側においてのみ支配階級たりうるのであって、したがって彼ら・彼女らが今持てる力を自ら放棄する可能性は、論理からしても、経験からしても小さいからである。第2に、我々一人ひとりが〈絶対的存在〉である以上、あらゆる判断は程度の差こそあれ主体的な行為として行なわれざるを得ない、したがってまずは〈自分〉から始めるしかないからである。すでに述べたよ

うに、我々の〈価値観〉の転換は、権力者・支配階級などの妨害者とのたたかいと自らのうちにおけるたたかいとの二重のたたかいとして進めるほかないのである。

ここでこの作業に着手しないということは、未来の世代が保証されるべき最小限の事項、すなわち〈4要素〉さえここで消え去るという可能性を拡大することになる。〈4要素〉の喪失は、同時に〈4条件〉の消滅を意味する。少なくとも〈4要素〉を確保し、これを未来の世代に確実に引き継ぐことは、人類史の中につくられた各時代・各社会の最大の責任であった。この責任の継承は終わったとする主張がその根拠を示すことはできないだろう。

同時に、現行の基本的〈価値〉およびそれを基礎とした支配的〈価値観〉の点検と転換の作業に我々が着手せず、これを無点検のまま〈(プラスの)価値〉として引き継ぐ、あるいはそのような作業を未来の世代に任せるというやり方ももう採(と)ることはむずかしい。というのは、それをもってしても手遅れにはならないということは誰も保証できないだろうからである。

〈南北問題〉の解決の基本方向も、我々の〈《人間》可能態〉としての〈進歩〉的存在という視点からの、今日基本的〈価値〉とされる「資本主義」の根底的点検、およびこれを基礎とする支配的〈価値観〉の転換という道程の中にしかないだろう。